

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：32640

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652042

研究課題名（和文） チュニジア古典音楽の楽裡と現代実践の解析

研究課題名（英文） Tunisian traditional music theory and analysis of its modern practice

研究代表者

松田 嘉子 (MATSUDA YOSHIKO)

多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：80407832

研究成果の概要（和文）：エジプト、スペイン、チュニジアで現地調査を行い、音楽家に聴き取り調査を実施した。アラブ古典音楽の新しい教育法についても調査した。また革命後の音楽事情を取材した。エジプト系オーストラリア人ウード奏者ジョゼフ・タワドロスを日本に招聘し、コンサートを開催した。期間全体を通じて、文献および音源の多彩な資料収集ができた。チュニジア伝統音楽研究機関「ラシディーヤ」との研究協力体制を強め、今後の展望が開けた。

研究成果の概要（英文）：I did field work in Egypt, Spain and Tunisia. Interviewed some musicians and also researched on the new method of musical education. Especially, I investigated the musical situation after the Revolution in Tunisia and in Egypt. On the other hand, I produced "Joseph Tawadros Oud Recital" in Japan. Throughout the entire period, I was able to collect a variety of books and sound source. In Tunisia, the tie with the institute Rachidia was strengthened and it opened a new aspect for the future.

交付決定額

(金額単位：円)

|       | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：アラブ音楽、チュニジア音楽、ウード

### 1. 研究開始当初の背景

チュニジア音楽は、アラブ音楽のマグリブ楽派に属するものの、エジプトやオスマン帝国の影響下で発達した東の諸楽派ともっとも関わりが深く、つまり、アラブ世界における西と東の両方の楽派が共存するという、特異性に富んでいる。

研究代表者はこの地で、アラブ音楽でもっとも重要な楽器とされるウード(弦楽器)の奏法を学び、アラブ古典音楽理論を習得した。最初に師事したのは、エジプト楽派のウードの巨匠、チュニス高等音楽院教授アリ・スリティであった。その後もアリ・スリティの弟子であるチュニス国立コンセルヴァトワール教授ハリッド・ベッサに師事し、エジプト

楽派の音楽のみならず、アンダルス音楽の系譜に属するチュニジア伝統音楽も学んでいる。また、エジプト楽派の音楽はその本来の土地エジプトでの習得も欠かせないことから、現代的ウード奏法の第一人者ナスィール・シャンマ主宰のカイロ・アラブ・ウード・ハウスで学んだ。

こうした経験を積み、演奏家としてアラブ音楽の最高峰とされるカイロ・オペラハウス主催アラブ音楽祭への出演(2002)という栄誉を得た。その前後から毎年、主要な国際アラブ音楽祭へ招聘される実績を、着実に積み重ねている。また、自身が作曲したアラブ古典音楽作品の数々が、アラブ世界で高く評価されている。

すでに学術的な研究として、複数の著作(単著、共著)および地中海学会における口頭発表等があり、また国立民族学博物館における複数の共同研究に館外研究員として参加しており、本研究の基礎的研究基盤は整っていた。

これまで行われてきた民族音楽学者や文化人類学者による研究業績に、演奏者としての内側からのアラブ音楽理解、研究の独自性を加えることが可能であり、日本とアラブ世界を行き来する中で、世界を代表する音楽家たち、研究者たちの知己を得て交流があることから研究環境は整っていて、さらに追究すべき時期と思うに至った。

## 2. 研究の目的

西洋音楽に匹敵する大きな音楽体系であるアラブ古典音楽の系譜とその関連について、文化的側面と音楽的特徴を比較しつつ、これまで我が国において、十分に行われてこなかったアラブ音楽の研究に具体性を付加し、西洋音楽との関わりについても検証する。特に本研究では、アラブ音楽の中でもチュニジア古典音楽に注目し、旋法体系、リズム体系について調査・研究を行い、大陸を大きく横断するヨーロッパ=アジアの音楽の潮流について明らかにすることを目的とする。

また、本研究を通じて、アラブ音楽、ひいてはアラブ世界への理解の一助としたい。

アラブにおいて音楽文化は民族に深く根付いており、その音楽遺産と現代も発達・進化し続ける内実を理解することは、アラブ世界の理解に大きくつながるものである。

## 3. 研究の方法

(1)アラブ音楽およびチュニジア音楽の代表的演奏家に聴き取り調査、討議、対談を実施する。古典音楽家の教養、美学、演奏技法、鍛錬法、使用楽器の特質等を記録する。

(2)主要なアラブ音楽演奏家や歌手の演奏を録音し、旋法、リズム、即興技法などの分析を行う。

(3)アラブ諸国および楽派によって異なる旋法理論やリズム理論を比較検討、整理する。

(4)西洋古典音楽とアラブ古典音楽について、和声と旋法理論、リズム理論、楽器の特質と奏法、教育法、美学、聴衆と演奏家の関係、作曲家の位置づけ等々について、比較研究を行う。

## 4. 研究成果

### (1)現地調査と資料収集

#### ①2011年度～エジプトとスペイン～

2011年1月のチュニジア「ジャスミン革命」をきっかけに、アラブ世界は激動の新時代に突入した。革命後は政情不安のためなかなか渡航できないのが実情であった。そこで2011年度は関連領域であるエジプトやスペインのアンダルシア地方で研究の基盤づくりを行った。エジプトも、チュニジアに続き独裁政権打倒後、混乱が続いている点では同じだが、2011年8月にはカイロに滞在し公演を行うと同時に、カイロ在住の代表的音楽家や研究者たちと会い、音楽事情を取材した。エジプト文化省の文化センターであるカイロ・オペラハウスのディレクター交替等、革命後の音楽界における勢力図の変化を確認、また古典芸術音楽家にとって演奏の機会が激減したため、仕事を求めて湾岸石油諸国等に出向く事例を多数取材した。

2012年3月から4月にかけて渡航したスペインでは、歴史的資料閲覧の他、現在にも及ぶアラブ文明とヨーロッパ文明の融合の模様を多々確認した。

エジプトでは、カイロ在住イラク人ウード奏者ナスィール・シャンマから、最新の著書「ウード奏者の夢」を献呈され、最近の活動を取材できたことは、特に大きな成果であった。その著作は、自伝とウード教則本の二巻構成であり、アラブ音楽の諸楽派間の比較と最先端の現代的ウード奏法の研究に最重要なものである。

またスペインでは、グラナダ在住モロッコ人歌手アミナ・アラウィと会い、やはり最近の活動の様子を取材した。最新アルバム(Arco Iris, ECM)は、フラメンコ、ファドの要素を取り入れた現代アラブ音楽の美しい精華の一つである。

この他にも、第一線で活躍する音楽家たちとの交流から、現代アラブ音楽家たちの実践や作品の特質を知るための貴重な資料を入手できた。シリアのフセイン・サブサビーからは大著「ウード」を贈られた。この本には、ウード作家でもある氏の長年にわたる楽器研究の結実を見ることができ、また氏を含むアラブ世界の最良のウード奏者たちの最新の楽曲の楽譜が載録されている。2011年11月には、欧米でも評価の高いチュニジアのウード奏者リアド・フェヘリより、DVD「赤い絨毯」を献呈された。それには西洋クラシック音楽とアラブ音楽の融合が見て取れる。

#### ②2012年度～エジプトとチュニジア～

2012年8月には再びエジプトで現地調査を行った。弦楽器ウードを中心とする現代的奏法については、カイロ・アラブウードハウス

の教育システムとその特質を調査し、教育メソッドの確立に大きな示唆を得た。カイロ在住イェメン人ウード奏者アフマッド・フェトヒの事務所を訪問し、スタジオ録音に立ち会い、新曲の傾向などを取材した。

2013年3月～4月には、チュニジアで現地調査を行った。また国を代表する伝統音楽研究機関である「ラシディーヤ」研究所において、自身のグループ「ル・クラブ・バシュラフ」によるチュニジア伝統音楽のコンサートを行い、大きな反響を得た。革命後2年が経過しても、まだ多少の混乱が見られるチュニジア芸術界だが、ラシディーヤ研究所を中心として、チュニジア古典音楽研究に大きな基盤ができた。資料収集では、チュニジアの代表的文筆家アリ・ルアティの新著「チュニジアの音楽」を入手、また伝統音楽マルーフの音源を多数収集した。

研究期間全体を通じて、文献、音源を含むアラブ音楽資料収集も順調に進み、イラク、シリア、レバノンなど他のアラブ圏の代表的音楽家たちとも情報交換ができたことは多大な成果であった。

## (2) 招聘アーティスト公開演奏会の開催

アラブ古典音楽の代表的弦楽器ウードの現代的な奏法を追求している、オーストラリア在住エジプト系ウード奏者ジョゼフ・タワドロス。アラブ圏に生まれ、そのルーツと文化教養を保持しながらも、一方で西洋世界からそれを見る視点を持ち合わせている点で、非常に興味深い存在である。その演奏を聴き、さらに芸術的コンセプトを聴取することを目的とし、日本に招聘して2013年1月16日、公開演奏会「松田嘉子アラブ音楽プロジェクト～ジョゼフ・タワドロス・ウードリサイタル」を開催した。またその前後に、インタビューを実施した。

### ① 公演プログラム

アラブ古典音楽理論にもとづいた、ナハワンド旋法による即興演奏に続き、これまでリリースした10枚のアルバムの中から、代表曲7曲を演奏(すべてジョゼフ・タワドロス作曲)。

### ② 使用楽器と奏法の特徴

元来ウードは複弦で5コースないし6コースが標準的だが、近年、ソロスタイルを中心に7コースのウードも使用される。ジョゼフ・タワドロスは、トルコのウード職人ヴェイセル・サルクシュに自分のシグニチャー・モデルの7コースのウードを製作させており、今回の公演にもそのウードを使用した。広い音域を駆使し、また弦高が低く複弦の幅の狭いウードを生かして、非常に正確な音程で速弾きや和音を演奏するスタイルにおいては、

弱冠29歳でヴァーチュオーソの域に達している。撥弦法においても、すべての音をクリアに出し、強弱の自在な繊細なトレモロからリズムカルで力強い奏法まで、技巧派らしさを余すところなく見せつけた。

### ③ インタビュー

ジョゼフ・タワドロスの音楽的経歴、幼少の頃から愛聴したアーティスト、また今日のアラブ音楽のアーティストや、現代的な作曲法や奏法、独自の鍛錬法について、インタビューを行った。

ジョゼフ・タワドロスは、祖父がエジプトで活躍する古典音楽の優れたウード奏者であった。3歳でエジプト人の両親および家族とともにオーストラリアに移住したが、度々エジプトに音楽研究のための滞在を続けている。オーストラリアの大学では西洋古典音楽の学位を取得した。つまり、アラブ古典音楽の理論と技法を十分身に付けた上で、西洋音楽を取り込み、自分独自の作曲および演奏スタイルを築いている。

ジョゼフ・タワドロスは、エジプト音楽黄金時代の代表的歌手ウム・カルスムの歌や、その時代の作曲家ザカリア・アフマッドやリアド・ゾンバティをこよなく愛している。さらに、現在活躍するウード奏者については、技術的な側面ではナスィール・シャンマ(イラク)を筆頭に上げるが、曲作りでは、ジャズのアーティストとのコラボレーションで西洋にも広く知られるアヌワル・ブラヒム(チュニジア)を尊敬している。その他、さまざまなウード奏者の演奏や楽曲について、さらに、世界的に有名な多様なジャンルの音楽家たちが参加したジョゼフ・タワドロスの近年のアルバムについて、その制作過程や音楽家たちそれぞれの特徴についても、話を聞いた。

ウードという楽器を中心にしながら、オーストラリア人として音楽活動しているジョゼフ・タワドロスは、アラブ世界には希有な新しい感覚と演奏スタイルを持っている。ウードの現代的奏法と可能性を考える上で視野を広げられ、非常に有益であった。また、音楽教育メソッドの確立についても多くの示唆を得た。

### ④ 反響

メディアでは、音楽評論家ピーター・バラカンが、自分のFMラジオ番組で何度も取り上げ、演奏会のインフォメーションに多大な協力を寄せてくれた。

音楽評論家、音楽家たちも含めたコンサートの観客からは、外国人ウード奏者の演奏を見られる貴重な機会であり、テクニカルなソロ演奏を堪能したという良い反響が得られた。

ジョゼフ・タワドロス自身からも、今まで一番印象に残るコンサートであり、またぜひ同じ場所、同じ観客に向けて演奏したいという熱い感想が寄せられた。

### (3) チュニジア伝統音楽研究所「ラシディーヤ」との協力関係

「ラシディーヤ」研究所は、1934年、チュニジア伝統音楽の継承保存と発展を目的として設立された。その名称は、音楽を愛するあまりに王位を捨てたフサイン朝2代目の王、ムハンマド・ラシッド・ベイに由来し、ケマイエス・テルナン、ムハンマド・トゥリーキー、ターヘル・ガルサ等、歴代の大音楽家たちが所長を務め、現在でも国を代表するチュニジア伝統音楽研究機関である。

2013年3月から4月にかけてのチュニジア滞在中、研究代表者とそのグループ「ル・クラブ・バシュラフ」は、ラシディーヤ研究所において、チュニジア伝統音楽のコンサートを行った。これまですでに同楽団は、チュニジアにおけるいくつもの国際音楽祭(ハマメット音楽祭、メディナ音楽祭等)に出演し成功をおさめており、チュニジアやエジプトの古典音楽を演奏する日本人アンサンブルとして知られていたが、今回の公演プログラムは、必ずチュニジア音楽であること、というのがムラッド・サクリ所長からの強い要望であった。

それに応え、プログラムはチュニジア楽曲と即興演奏、それに松田嘉子作曲「サマイ・ハスイン」(ハスイン旋法による器楽曲)を加えた。演奏終了と同時に、同研究所が招待した200人を超す観客からスタンディング・オベーションを受けるといふ大反響を獲得した。「サマイ・ハスイン」は、チュニジアの耳のこえた聴衆に、チュニジア独特の旋法であるハスインの楽曲が外国人により作曲されたという強いインパクトを与え、しかもそれが名曲であると高く評価された。

その結果、演奏家・作曲家・研究者として高い評価と信頼を得て、今後の継続的発展的協力を要請された。折しも革命後のラシディーヤは、これまでのチュニス中心の中央集権的な音楽研究機関のあり方を見直し、地方都市(スファックス、ビゼルト、テストゥール等)の楽団との連携、またフランス在住のチュニジア人楽団との連携を強化しようという姿勢を打ち出していたところであった。ムラッド・サクリ所長は、「ル・クラブ・バシュラフ」を中心とする「ラシディーヤ日本(支部)」の設立を望んでいる。

チュニジア音楽の伝統保存のみならず創造的発展に、外国人として寄与貢献できるとすれば嬉しい限りであり、また最高の名誉である。研究代表者の今後のチュニジア古典音楽研究にも大きな基盤ができたことにな

る。こうした信頼と協力関係をもとに、さらにチュニジアのトゥパー(旋法)やイステイフバル(即興演奏)の研究を進めて行く方針が立った。

### 【写真】



※ラシディーヤ研究所における「ル・クラブ・バシュラフ」コンサート終了後、ムラッド・サクリ所長より表彰の盾を授与される研究代表者と楽団メンバー

また、この歴史的コンサートはCDとして記録に残し、ビデオ映像の一部はインターネット上に近々公開する予定である。さらに、チュニジア音楽の解説を付加し、出版する形で、研究成果の公開を行いたいと考えている。

最後に、ラシディーヤ研究所は2014年に設立80周年を迎えるが、それに際しても多大な協力を求められている。公演と研究の両面から、アラブ音楽、ひいてはアラブ世界への理解の一助となるよう、協力を惜しまない所存である。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕

ホームページ等

①arab-music.com

<http://www.arab-music.com/>

②松田 嘉子アラブ音楽研究プロジェクト  
ジョゼフ・タワドロス ウード リサイタル、2013年1月16日、杜のホールはしもと(神奈川県相模原市)

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 嘉子 (MATSUDA YOSHIKO)  
多摩美術大学・美術学部・教授  
研究者番号：80407832